

## ミキ先生の教育

江 後 迪 子

武田ミキ先生との出会いは、昭和四十九年私が大学院修士課程を修了して広島文教女子短大へ職を得たときである。当時の広島文教女子大は学園創設期を過ぎ、ようやく運営も軌道にのり始めたところかと思う。

先生はいつも質素な和服に身をつつまれ、朝早くから夜遅くまで学長室におられた。

その頃の文教で感じたことのひとつに、学生数に比し教授人員の多かったことがあげられる。定員割れの学科にも、それぞれ専門のスタッフをおいて教育の充実をはかっておられた。決して楽ではなかったと思われる経営の中

## 二、教育一途の人

で、人づくりに対する先生の姿勢がうかがえたものである。

また、私たち大学側の立場の者にとって、ときに付属高校に対して批判がましいことを口にしたこともあった。このようなとき、先生は武田学園の設立は付属高校から始まったことを涙ながらにおっしゃられ、高校をかばわれた。学園全体を守りたいというお気持ちが強かったのだろう。

また、先生はおすしが大変好きであった。昔のハレのご馳走にはすしは欠かせない献立であり、先生の幼いころにはおすしはそれだけでご馳走という時代だったと思う。しかし、夜遅くまでの会議の後や、創立記念日などには必ずあらわれる、上に具のちよつぴりのつた押しすしは、高度経済成長期であったその頃にはご馳走とはいえないものであった。文部省などへの度々の上京の折にも、お弁当は必ずといっていいほどおすしであったと聞く。これも質素な生活ぶりのひとつである。ともすれば私腹をこやす現在の政治家たちに聞かせたい話である。

このような先生の方針がどのような評価を受けていたかについてふれよう。私が大学に勤務する前は、山口県の高校に勤務していたこともあって、高校の先生がたから文教の評判を聞く機会があった。「地味だし、しっかりした学生が育っている」という受け止め方をされていることを知ったとき、これはミキ先生の教育方針が学生たちに浸透していると思つたものである。このことは、きつと今でも変わらないことと思う。

それはそうと、先生からはよくお小言を頂戴した。周囲にいるだれも同じであるとは聞かされていたものの、明治女と昭和生れの者との価値観の差はいかようにもしたがたく、その折々に辛い思いをしたことが忘れられない。旅立たれた世界でも、まわりにお小言を言っておられるのではないだろうか。